



関西 ECOMAIL

環境教育学会関西支部から関西の会員の皆様に、ワークショップのお知らせと関西の環境教育に関わる情報交換をしていただくために発行しています。

また学会員外の方々が環境教育に関心を持っておられる方や実践をされている方のコミュニケーションも広く図りたいと思います。

1000円の通信費(1年分)をいただきましたら、ワークショップの案内図書と ECOMAILを送らせていただきます。

(通信費振込先……郵便局「大阪 9-37886」環境教育学会関西支部)

関西ワークショップのお知らせ

第17回 3月21日(土) 2:30~5:00 (※前号で開催日を3/28とお知らせしておりましたが上記のように3/21に変更させていただきます)

話題提供 松林 昭さん(京都・光華小学校)

「小学校では環境教育をどのように指導するか」

会 場 大阪教育大学(天王寺) 第13教室

JR環状線寺田町駅下車 西へ徒歩3分/天王寺駅下車 北東へ徒歩7分

第18回 4月18日(土) 3:00~5:00(講演) / 6:00~7:00(むささびウォッチング)

話題提供 久山喜久雄さん(法然院 森の教室 代表世話人)

「里山での環境教育の実践」

会 場 法然院講堂(京都) (詳細は追ってお知らせします)

◆5月のワークショップは日本環境教育学会第3回大会(愛知)が開催されますのでお休みにさせていただきます

日本環境教育学会第3回大会(愛知)

日 程 1992年5月16日(土)~17日(日)

第1日 10:00から 小集会 一般講演 総会 懇親会など

第2日 10:00から 一般講演 特別講演 シンポジウム

会 場 愛知教育大学/愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢1

名鉄線知立下車バス約25分(名古屋から約1時間)

会 費 会 員: 前納 3000円 当日 3500円

学 生: 1500円 会 員 外: 3500円

問い合わせ先 〒448 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢1, 愛知教育大学,
生物学教室 金森正臣 (0566-36-3111 内 571-576)

第14回ワークショップ(1991.12.7) 報告

宗教思想と環境倫理

山田弘司(日本非鉄金属商工連合会)

1. 宗教(仏教)の目ざす真理と過程

仏教であれ、キリスト教であれ、あらゆる宗教の目標は現在と未来の恐怖、不安を除去し、人生苦を消滅して生きて行く上での安らぎの境地を与えるものである。仏教では更にすべての生物、草木、国土等自然環境、社会環境すら仏性即ち生命を保ち、幸せを願っていると考えている。現在、地球環境は苦に満ち満ちている。苦の因を論ずるに縁起観に根拠を置き、すべて主因→助縁→結果と考え、結果が即あらたな因となり連鎖的に次から次へと悪因を増幅し、他方に於いて結果が果報という形で関係のない他に影響を及ぼして行く。人間が欲望に執着して、一人一人の行為(業)が生存共同体の中で共通の業となって環境を破壊していることを認識しなければならない。如何にして苦の世界から脱却するか。

2. 価値観の構造と結び付き

人間の行動にはその根底となる原動力が存在している。成唯識論では五官(前五識即ち眼耳鼻舌身)に依り感受された認識作用が意識(六識)に依り判断分別され自我意識(末那識)→深層意識(阿頼耶識)へと伝わり心識の貯蔵がなされる。

この末那識、阿頼耶識はその人の人格、価値観を形成する。前五識で捉えられた一つ一つの素因は長くかかって積集され深層に貯えられる。この様に貯えられた知識体験(受動心識)が何かの縁に触れ、深層心理から自我意識(能動心識)→六識を通し身口意の三業(行動、言語、態度)として五官を通し行動として外部環境に出る。人間は心識の動きにより善にも悪にも無限性を持っている。そして心識の中に自己の過去と現在と未来を包含している。しかし乍ら過去は過ぎ去った。未来はこれからである。それ故に現在の自己一人一人が未来を規定する。

3. まとめ

以上、心の在り方、人間の心理の動きを仏教の思想を借りて述べてきたが人間はとかく真理、理念より感覚性、感受性が優先する。理念、善意は感性又は深層心理に依り抑制され行動は制限されやすい。しかし絶え間無い努力(精進)により次第に改善され変化していく。自己改革の必要性がこれに求められる。仏教では自己改革と外部環境への配慮を人格形成の目的としている。自己が変化することにより他人に影響を与え、他人が又他の人に影響を与えることにより社会全体が良くなる。少なくとも一人一人が他の生命財産に、地球そのものに迷惑をかけない心を保持し愛着を注いでほしいものである。

「環境教育レポート」

「環境教育レポート(平成3年度版)」が環境庁企画調整局企画調整課より送られてきました。各都道府県、政令指定都市における概要が、

- ・地域における環境教育事業
- ・学校教育における環境教育事業

の別に記されています。IとIIの2冊からなり、総ページ数1821ページです。

第15回ワークショップ(1992.1.25) 報告

環境教育シンポジウム「環境教育から余暇教育を考える」

恒例化した関西支部ワーク・ショップに節目をつける意味で、1月25日に環境と余暇を考える講演と討論会が開催され、環境学習で豊かな余暇ライフを！土曜日は塾、それとも原っぱで遊ぶ？といったキャッチフレーズで、会員の他に一般の人達にも呼びかけました。参加者は定員の150名には達しなかったが、会場一杯の盛況で各界の会員以外の参加者も目立ちました。

第1部は、昨年ロンドン大学ワイ・カレッジ客員としてヨーロッパの都市の自然を研究して帰国された大阪府立大学の重松敏則先生に、「ラベンダー池自然公園(ロンドン)の子どもたち」のスライドを映写していただきました。先生のこの映像やお話はいま大きなセンセーションとなっていて「ぜひ」という声もあったので、時間の無理を押しお願いしました。ロンドンという大都市の中に残されていた自然を、市民・行政・企業の連携により見事に回復させ、市民にアメニティ豊かな自然環境と子どもの環境教育に活用させている姿を見て、わが国とは自然や環境に対する認識に歴史的なズレがあるとしても、都市の自然が全滅しないうちに私たちも早く手を打たねばと思いました。つづいて宇都宮大学生涯学習教育研究センターの瀬沼克彰先生の基調講演「余暇教育とは何か」を聴講しました。先生はわが国の余暇教育の先駆者として関係著書も多く著わされており、昨年まで文部省生涯学習局の社会教育官としてご活躍になっていたこの道の権威です。脱工業社会で私たちが初めて挑戦する余暇時代。それはヒマとか休息とか気ばらしといったこれまでの「余暇」に対する考え方を越えて、社会や教育のしくみを根本から考え直す問題であることを、わかり易く話されました。特に6歳から10歳までが余暇教育にとっても重要な時期であり、また若者のレジャー上手にも鋭い批判を加えられて、青少年の環境学習の大切さを日頃から意識している私たちの視座に新たなものを与えて下さいました。

第3部の「環境教育から余暇教育を考える」シンポジウムは、今回は都合によって会員の先生方のボランティアでおこなわれました。「環境学習とはライフスタイルを見直すことであり、余暇時代のライフスタイルのあり方は環境学習と密接な関係がある。とくに学校5日制に結んで子どもの生活にフォーカスを当てて議論したい」という大阪教育大学の鈴木善次先生(コーディネーター)の言葉で始まり、まず甲南大学の谷口文章先生からピーパーの余暇理論やカイヨワによる「遊び」の定義などをベースとした哲学的、心理学的な考察についての発言がありました。また奈良文化女子短大の榎村久子先生は、余暇の活用や環境学習にとって大切なものは人と人、人と自然のコミュニケーション回路の回復と創造であり、そのための法制など社会的基盤整備が先決であるとして、余暇を特に女性と労働の視野で透視しながら意見を述べました。YMCAの上村賢先生は、「ファミリー自然教室」の活動を中心に自然教育・環境教育の豊富な取り組み事例をあげて、心と体、知と情、社会的健康のバランスを大切にすること。とくに子どもの活動には「場」づくりをする指導者の必要性を強調しました。最後に「余暇という自由時間を、いかに人間らしくいきいきと充実させるか。それは人間の内面の問題であるとともに場や人材と言った、つまり社会的システムの確立も必要である」という鈴木先生のまとめで討論を終えました。なおフロアからも、「余暇には無為の効用も」「子どもを土から切離したのは大人の責任」「余暇教育の主人公は誰なのか」など、この問題をシビアな目で見たい意見が続出しました。

最後になりましたが、このシンポジウムに東京よりわざわざお越しくくださった瀬沼先生をはじめ、重松先生と関西支部の諸先生方に数々の貴重なご指導を賜りました事、並びに日本余暇文化振興会と大阪府立文化情報センターのご厚意とご支援に感謝いたします。

(文責 赤尾)

第16回ワークショップ(1992.2.22) 報告

楽しい自然環境学習

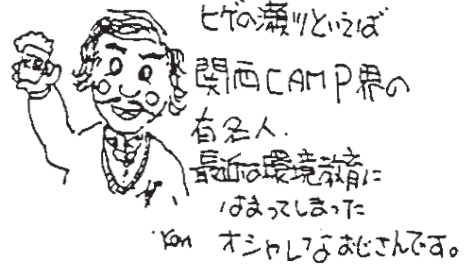
本庄 眞(奈良・東榛原小学校)

楽しいということは、教師(指導者)が、楽しいということが1番大切である
と考える。そこを徹底的に押しつければ、子どもも含む普遍的な楽しさにな
るだろう、と考える。欲張って、3つの報告をした。(2)と(3)の報
告は、(1)の土台にもなっている。(1) [川の生物を通して、自然との共
鳴感を育てる] 小学校低学年・高学年の具体的実践を、環境教育の視点から具
体的に吟味してみた。授業の基本を次のように考えた。①体を通して、感性を
通して分かるということを大事にする。(実感がわからないものに、感動も意欲
もわからない。まして、行動にはつながらない。そのため、五感で生き物をとら
える。つかまえられることも大切になる。活動のなかで、生き物の多様性に、
子どもたちも自然に気付くだろう。) ②事実を通して、具体的なとらえがで
るようになる。授業は視点を与える場である。(観念的なとらえでは、子ども
は納得しない。はいずりまわる授業では、一部の子どもの満足になる) ③飼育、
観察の感動は、生命の教育につながる。(飼育中に動物が死んだとしたら、何
故死んだのかという問い返しが、環境教育につながる。) ④授業と生活の連続
をはかる。(そのため、理科だよりを発行している。これは、どの子も生かす
という視点にもつながる。広いアンテナをはれる子どもを育てることにもつな
がる。) ⑤地域の素材を大事にする。(今回は、サワガニを用いた。私の地域
では、ザリガニよりも利点が多い。)(2) [東南アジアの河川(自然)と人
間] スライドを通しながら、説明した。①スマトラ北部の河川(湖)と人々の暮
らしについて。(マラリアと人々の暮らし、川と人間のつながり、学校の様子
など) ②マレーシアの熱帯林と川、オーランアスリーの暮らしと文明、等を通
して、田舎が生きている、まだ川と人間がつながっていることなど、強調した
かった。中国については、時間なく、新聞資料で中国の河川の状態など説明を
した。(3) [科学と人間という視点から、環境教育をみなおす] ①科学は、
物の全体像を把握できないのではないか。科学の有効性と限界をふまえた位置
付けが必要である。②自然、人間、科学が共存するには、絶対値ではなく、人
間との関係値を基本にした学問を大切にする。 (これについては、科学に
は、規範がなく、それを補うのが哲学であるという指摘を受け、参考になった。)
科学と共存していくには、人間を過小にも過大にもとらえないことが大切であ
る。人間の實力(弱さ、愚かさ)の自覚が大切であり、それをとらえるには、
歴史と同時に文学の価値もでてくるだろうと考える。③全体自然を楽しむため
の、そして、動物としての自分(野性)を取り返すための野性的探検を勧めたい。
農や漁の分担者たちが自信と誇りをもてる社会を創るには、(今の日本の
社会では、至難の業としても) どういう具体的な教育が可能であろうか(これ
は問題提起にとどまる)。

ECOLO人

これでも私はECOLO人？！

瀬川健三（大阪YMCA）



今やそのスジの人なら誰でも知ってる「環境共育ワークショップ」を関西でやり始めようと準備にかかった1990年9月、高田研氏にそそのかされ、生まれ変わった“カンキョーケンちゃん”が、前世の40数年間を振り返って自問自答してみました。
さて、ECOLO人の仲間入りができたのでしょうか。

むかし----現在の勤務地である六甲研修センターに着任した頃は六甲山中にタヌキ、キツネ、イタチ、テン、アライグマなどが棲んでいるとは思ってもしなかった。
いま----ある日、犬でも猫でもない四つ足動物がセンター内を駆け抜けるのを偶然見て以来、足跡とウンコを追いかける日々が続いている。でもあの時見かけたのはタヌキかキツネか今だに不明。

むかし----キャンプで火をおこす時のたきつけにする以外はゴミ箱に捨てていた牛乳パック。
いま-----娘の夏休みの自由研究でパックの紙すきをさせて、すばらしい環境教育をしたと思込んでいる。切り開いたパックが現在ダンボール箱に3つ程たまっている。

むかし----昭和20年代、“白桃の缶詰”のアキカンを大切に洗ってためておきカンケリをして近所の子供と遊んだ。
いま-----たまに飲む缶ビールのアキカンで、罪の意識を感じながらもゴミ箱へ捨てている。

むかし----脚を鍛えるために、エレベーター、エスカレーターを使わずに階段を駆け上った。
いま-----乗る人がいなくても一日中うごいている駅のエスカレーターを横目に見ながら“老いは足からくるぞ”とおどされて、今も階段を駆け上っている。

むかし----「使っていない部屋の電灯は消しなさい。電気代が高くつくよ。」と親から怒られながらも、真暗な部屋ではこわくて寝れないので、朝までついていることがよくあった。
いま-----「おとうさん！エネルギーをムダ使いしたらあかんで。電気消し！」と娘からどなられる。

むかし----20~30才代、連日連夜、ネオン街を徘徊し必要以上のアルコールを消費すると同時に、身分不相応な国税を納めていた。

いま-----週に一回は休肝日を、そして一度に飲む量も半減した。
(そりゃ年のせいや! ウン、そうとも言える。)

むかし---"南米の乾燥台地をバタゴニア地方という"と、中学校で教わった記憶がある。
いま-----アウトドア派のグッズを扱う同名のおみせがあることを最近知った。売上げの何%かを環境保護の基金として返出しているらしいということも---

むかし---定期代を遊ぶお金に使ってしまい電車に乗らずに、自転車で高校、大学に通っていた。

いま-----地下鉄一区间分の差額をケチるために一つ手前の駅でおりて歩いて帰宅することがある。

むかし----子供の頃、空を飛んでる鳥を見て、スズメとハトしか見分けがつかなかった。
いま-----六甲山の森の中にはスズメとハト以外の鳥がいることに気がついたが、鳴声を聞いても姿を見てもやはり区別がつかない。

むかし---目の前でビクビク動いている"エビのおどり"や"鯛の活造り"は残酷に思えて好んでは食べなかった。

いま-----人間の食料はすべて、他の生き物の命をいただいているのだということを改めて認識し、日々感謝して食事をしている。(それでも目の前でビクビクするのはキライ)

むかし---森の中を歩く時、"10Kmを1時間で歩いた"など健脚さを自慢するだけで、ゆっくり木や生き物を観察することはなかった。

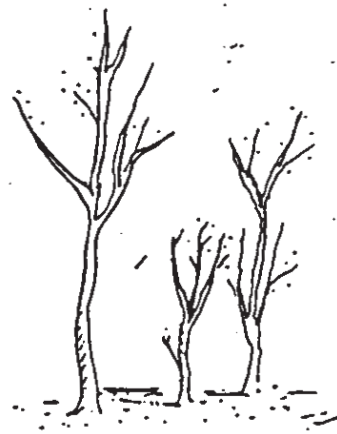
いま-----ふと立ち止まって鳥を呼び寄せたり、最近では木とお話までできるようになった。

~~~~~  
F.COLO人インタビュー・小林学級(5年生)の作品から

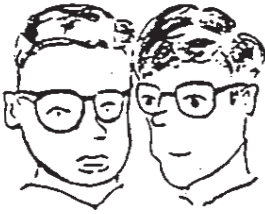
おい、そこのはげぼうず  
かみの毛はすっかりぬけちゃって  
洋服もやぶけて  
何も持物はない  
毛を抜かれた犬のように  
気が抜けている  
さびしさもあるが  
おまえにはたのしみもある  
ほら よくみてごらん  
新しい芽がりっぱに  
そだっているではないか

木

吉野香織



## “大阪ことば研究会” 小林 武先生・渡辺義広先生に聞く！



### 大阪ことば教育研究会

関西地区で、長年に渡り、地道な活動を続けている国語科研究サークル。小学校から高等学校まで、幅広い会員層を持つ。

**小林武** ・大阪ことば教育研究会代表 ・寝屋川市立和光小学校  
**渡辺義広** ・大阪ことば教育研究会事務局 ・岸和田市立旭小学校

聞き手：本日はお忙しいところ、どうも有り難うございます。よく、子ども達に自然についての詩を書く指導なさって、おられるとのことですが。

小林：自然の詩を書くと言うことは、1つは、自然を見る目を人間は本来、みんな持っていると思うんですよ。人間は、自然の中で生き、自然に育てられているのですから、自然を見て自然の美しさや、自然の摂理、自然の素晴らしさを感じ取り、分かるということは、大人、子ども関係なく持っていることだと思います。それをいかに文字言語でもって認識していくかということでしょう。認識するということは、個々別々に見たり聞いたり体験したりしたことを知覚し、同時にふる一つの典型化、概念化することが認識ですから、それを詩という文字言語で、表現することによって、1人1人の人間の心、子どもの心の中に定着させるということが、詩の持つ力といえると思いますよ。それを、小学生ならなおのこと、幼児の小さい頃から、自然と人間との関わりということに常に敏感に、シビアに見させることができるものが詩ではないでしょうか。詩というものは、自分と自分を取り巻く環境、いわゆる自然との対話の中から色々なものを学ぶと言うこと、そのことを言語に置き換えることによって、初めて認識し、詩的表現になっていきますから。

渡辺：人間だれも感じているのは確かだと思います。子どもも、当然感じています。ただ、感じているものを言葉を使って意識化していく。それと同時に見方も言葉によって規定されていくと思います。言葉に表すぞと思うと見えてくるもの、そうしないと禁通りしていってしまうということでしょうか。その事は、詩を書く上で、特に大切なことであると思います。感じていくと言うレベルでは、みんな感じているんだけど、普通は禁通りしていきんですよ。それを言葉によって、もう1度再確認する、見直す、気付き直すことが出来るし、さらには、その見方が鋭くなっていくと思います。そのことがないと、詩は成り立たないでしょう。

小林：極めて、日常的なことを、非日常的なものにするのが詩的営みなんですよ。例えば、目の前にあるものは何の意味もなく流れ去って行く。それは、自然と己との関わりを全く意識しないで流れて行く。ところが、そこにもっと踏み込んで異化して、そのものの見方を変えてしまう。その中に新たな発見がいっぱいでくる。異化するということは、見直すということなんですよ。自分の生きている姿をね。同時に、自分と自然、自分と地球、自分と環境の中で、自分の存在を確かめていくことですよ。そういうことは、詩に書くとか、言葉によって表現することによって初めて組織される。目の前に広がっている姿が、詩を書くという言語活動によって新たな価値を発見されていく。言葉というものは、決して道具ではなくて、単なるコミュニケーションの手段ではなくて、人間そのものを育てていくという大きな意味があります。それは地球という、一つの環境の中で、自分の存在という、自然の摂理というものを感ずるのは、言葉というもので自分

を表現した時に出てくるということでしょう。そういう言葉の働きというものは、人間というものを再確認させ、人間の存在というものを改めて問い直す、さらに言えば、人間という存在は、言葉でしか問い直せない、言葉というものは、それ程重要な意味を持っているということでしょう。

聞き手：その人間と言うことに関して言えば、自分自身との新たな出会い、自分を含めた自然との新たな出会いということでしょうか。

小林：己との出会いとは、映像化することと、言語化することがあると思いますが、映像化は、まだ、弱いね、言語化することの方が、はるかに強いと思います。

渡辺：受け持つ範囲が違うと思いますよ。やはり、それは言葉に表すと言う、意識的な働きですよ。感覚もあるけれど、感覚と意識というものを、もし分けたとしたら、言語は意識の方にウエートが掛かっているんじゃないでしょうか、映像の方は感覚の方にウエートが掛かっているんじゃないかな。でも、どちらかを否定することはまずいと思います。どちらの優劣ではなくて、言葉を重視する人は、言葉で、映像を重視する人は、映像で持ってそれをカバーしようとしているのでしょうか。

聞き手：互いの相互作用があるということですね。

小林：具体的な子どもの世界からしゃべるとするとね、子どもの目と言うのは、対象を素直にみるんです。自然の差異も、恵みも、豊かさも、既しさも、みんな、子どもはまともに受けるんですね。大人は台風が来たら、あーすればいい、こうすればいいという様にやるけれど、子どもというものはそうは考えない、自然の畏敬を、まともに、素直に受け止めるから、詩が生まれるんです。だから、子どもの詩と言うのは、大人が学ばなければいけない。自然に対しての1つの考え方が出ているんだよね。そこが、素晴らしい。

渡辺：マニュアルでね、こうすれば、こう対応するしか大人にないでしょ。でも、子どもは台風を楽しむということがあるでしょ。風の強さとかを楽しむでしょ。大人は、雨戸を打ち付けるとか、大丈夫かなって心配し、対処の仕方を最優先させるけど、子どもの場合は、違うんですよ。もう、わくわくする。雪が降っても、そうだと思うんですよ。大人は、明日、会社に行けるかなとおもってみたりするけれど。

小林：つまり、環境の持つ意味とは、子どもの小さい時の方が、大きいんでしょうね。大人になればなる程小さくなってしまふ。自分の求めるものにしか目が行かなくなってしまうんでしょう。でも、子どもと言うのは、自然のおもしろさ、すごさ、美しさを素直に受け止めます。そして、その自然を実際に実感出来ていくのも、子ども時代なんです。だから、木登りする。野山を駆け巡る。色々な草花におもしろさを感じとる。大人になったら、草1本だって、自分の管理社会の必要、不必要で処理されてしまふ。でも、子どもはそうではない。1本のタンポポだって、それは美しいとか、素晴らしいとか学ぶんですよ。端的にいうと、小学校、中学校の教育の中でこそ、環境のことをきちんと指導していかないといけないと思います。

聞き手：確かに、今、この環境の問題について、教育現場で、どのように指導していけばいいのか、多くの人々の意識に上がって来ている割には、具体的な所が弱いですよ。

小林：文学の中の詩をなぜ教材化していくのか、さらに、詩でもって何を感じとらせるのかということ、地球という大きな世界をどうやって、認識させるということ、その1つ1つを感じとらせるということですよ。その事が、環境に対する反応を敏感にするとします。

聞き手：それが自分の生活を、例えば空き缶1つでも、きちんと後始末出来る子に育つということでしょうか。

小林：それを、徳目的な倫理や道徳でやっても、仕方がないんです。

渡辺：自然自体がいきているという認識が欠けていると思うな。何をしても自然は変わらないんだと思うことが、1つには地球なり、大気なりを汚して来たんだろうと思います。



聞き手：人間も、自然の中の一部と言うことでしょうか。

渡辺：それは、子どもには分かりにくいでしょうね。子どもには、自然は生きているんだということを知ってもらおうことでしょうか。生きている人間が人から叩かれれば痛いでしょう。自然に汚い水を流せば、自然は病気になるんだ。死んでいくんだということが、分かっていかないといけないでしょう。今までだと、自然って永久不変であったものだったでしょう。人間がそこに働き掛ければ、いくらでも出してくれるという認識であったと思うんですよ。でも、自然を叩けば痛がるし、大切にすればきれいなものになっていくことが分かってくれないと。

小林：そのことを、多くの文学が今まで語って来てるんですよ。

渡辺：そこで言葉の力っていうのが大切なんですね。

小林：自然というのは生きてるんですね。死んでちゃ文学になりません。

聞き手：例えば、宮沢賢治の「やまなし」や、他の多くの自然を題材にしたものがありますね。

渡辺：子どもの場合だと、擬人化ということをよくするでしょう。

小林：アミニズムのことですね。

渡辺：生きているという感じが大事だと思うんです。木が寒そうに思うとか、虫に葉や木が食べられているのを見て、痛いと思うとか、自然を擬人化していくことが必要だと思うんですよ。子どもは、それが自然に出来るしね。言葉で認識していくことは、例えば俳句で季語があるでしょ。冬のは「山ねむる」って言うんですよ。春のは「山わらう」って言うんですよ。それは、山を擬人化しているでしょ。そうなると言葉というものにね、自然を見ようとする時に、自分に引き付けて見たり、その本質で他の人が分かるようにしようとする働きが、言葉にあると思うんですよ。

小林学級（5年生）の作品から



|                    |   |
|--------------------|---|
| 鳥よ                 | 鳥 |
| さみは いつも自由だ         |   |
| 空高くとんで             |   |
| どこまでもどこまでもとんでゆけて…… |   |
| さみには 不幸というものが      |   |
| ないのだろうか            |   |
| さみは いっただい          |   |
| どこまで自由なんだ          |   |
| おしえておくれわたしにも       |   |
| 空高い 青空の自由を         |   |

酒井富美子

小林：「芋の露連山影を正しゅうす」という俳句がありますが、西郷さんは高貴と卑俗からいえば、連の花は高貴で、芋の露は卑俗といった。ところが、ある人は、これは安定と不安定の問題だと言った。だから、自然1つを見ても、みんなの見方が違うんですよ。10人いれば10人に感想の仕方というのは、多種多様だということですね。大人でもこうなのに、子ども達は、さらに多種多様、様々に反応しているはずなんです。しかし、実際はそれをスポイルされてしまってる。教育は、スポイルしてしまっているんですよ。だが、子ども達が自然に対して、多様に反応していることに、もっと私達が敏感にならないといけないでしょう。教育において、特に環境教育の1番大事なことだと思うんですよ。言語表現を抜きにして、これらのことは語れないんですよ。

聞き手：自然を見た時に、普通だったら、さぁと通り抜けるものが、言葉というフィルターを通して、自分の中で、自分のものとなって、新たに生まれて来るといふことなんですか。

小林：再創造というのかな。はっきり言えば、子どもと自然の媒介をするものは言語か音楽、踊り絵かかないと思うんです。自然と人間のか関わりの中で己の意思を表現するのは、言語か音楽、踊り、絵しかない。その中でも、言葉と言うのは、本当に巾のある鋭い動きを持つものです。人間が活着ている上で、何かよりどころになると言えば、人間のクリエイションもイマジネーションも、あらゆる人間の知的活動の要は言語ですよ。

渡辺：自分で、その言葉を使って表現するということがないと、価値は半減するんです。いや、もっとかな。今言ったことは、全部、言葉の1つの力なんだけれど、それを働かすには、「言葉で働かす」と言うことがないと、子ども達に価値ある「力」を育てていけないでしょうね。

小林：それが、大阪言葉研の研究テーマですね。

聞き手：本日は本当にありがとうございました。言葉の持つ、人間を育てる深淵な力の中に、現代の環境問題の本質的課題を解決していく、最も大切なものが存在していることが、理解出来たように思います。

(聞き手：北村直也)

## ネット・ワーク

### まちのおもしろ探検隊4「まちの工場探検隊」

3月25日(水)・26日(木)(1泊2日) ☆ 市内の工場こだわり隊、まちのにおいこだわり隊ほか 費用：2000円 申し込み：豊中中央公民館 ☎ 06-866-0555

### 大阪府自然観察指導員養成講習会(大阪府立総合青少年野外活動センター)

5月23日(土)～25日(月)(2泊3日) 🐾 自然保護の基本的な考え方や自然観察の方法を研修し、地域で自然の大切さを伝えていく指導者の養成を目的に講習会を開催。  
費用：一般 25000円/保護協会、保全協会どちらか会員 21000円/両方共の会員 17000円  
問い合わせ：府内在住者 大阪自然環境保全協会 ☎ 06-374-3376

府外在住者 日本自然保護協会普及部 ☎ 03-3503-4896

主催：観大阪自然協会 観日本自然保護協会 NACS-J



★ 関西ECOMAILへの投稿を募集しています。

★ また、ネットワーク欄への情報提供もよろしくお願い致します。

---

関西ECOMAIL 第11号 1992年3月13日発行

通信費 一年 1000円

編集 日本環境教育学会関西支部世話人会

発行 日本環境教育学会関西支部

事務局 大阪教育大学 環境科学教育研究室 (鈴木善次研究室)

〒543 大阪市天王寺区南河堀町 4-88 (☎ 06-771-8131 [内線 417])

次回 第11号 1992年5月1日発行予定 原稿締め切り 92年4月20日